

分裂病心性への接近

Ⅳ．姉・妹・弟4人に現われた妄想についての一考察

布 施 清 一

KIYOKAZU FUSE

弘前大学医学部神経精神医学教室（主任 佐藤時治郎 教授）

布 施 病 院

（12. 1. 1970 受付）

緒 言

精神医学における妄想研究は、近代精神医学が確立される以前からの重要な主題の一つである。

現在、妄想について、特に分裂病性妄想についての代表的な理解の仕方には、K. Jaspers, H. W. Gruhle, S. Freud, E. Bleuler 及び人間学的立場があげられる。

K. Jaspersらは、原発性妄想体験、すなわち妄想気分、妄想知覚、妄想表象などは、心理学的には了解不能なものとし、その病的体験の背後に特別な Prozess があると考えた。

H. W. Gruhle は現象学的に還元不能、了解不能な原発体験である真性妄想は、器質的大脳病理学的症状であるとした。

しかし、K. Jaspers, H. W. Gruhleらのいわゆる Heidelberg 学派の上記の如き妄想に対する見解は、分裂病妄想に“unverständlich”というレッテルを張りつけることによって、病者の心性の理解に大きな障害となってきたことも否めない事実である。

一方、E. Bleuler は病者を全体的状況の下に把握しようとする精神分析学の影響を受けて、分裂病性妄想が自閉と分裂という二大基本症状に還元できると考えた。

この Bleuler 的な人間的共感性の喪失を基本と考えた妄想論は、Minkowskiらに受けつがれながら次第に、人間学的理解へと発展し

てきつつあるのである。

S. Freud は妄想を、深刻な精神的破局状況を必死に防ごうとする自我の営みが、疾病への抵抗すなわち、無意識衝動的観念が意識へ侵入することを二次的に防衛した結果として理解しているように思われる。

かくして S. Freud は、有名な Schreber 症例を通じて、被害妄想・被愛妄想成立の公式を作りあげた。この S. Freud の妄想理論には、深い人間理解のまなざしを認めることはできるにしても、そこには多くの独断的公式化、飛躍を認めない訳にはいかない。

また近年、Binswanger らは現存在分析的立場からの妄想論を展開し、精神療法過程、詳細な縦断的生活史の検討を行ないながら、分裂病妄想を現存在としての病者のもつ非本来的態度可能の具体的現出に他ならないとしている。

以上、簡単に近年における分裂病妄想理解の諸立場について述べたが、現在なお、分裂病妄想の本質的なものへの接近が模索されつつある現況である。

特に最近では、分裂病者の精神療法を通して、その発病状況の解明、妄想成立機転の分析が精力的になされつつあるように思われる。

今回、著者は、母の性的無軌道、近隣の人々の嘲笑にさらされるといった深刻な葛藤状況で、ほぼ同時期に発病したと推定される、

姉妹、第4人の分裂病者の妄想を、患者の生活歴、家族関係、心的葛藤状況など種々の面から検討する機会を得たので、妄想発生の心的機制を中心として追求してみたい。

発病までの家庭生活

父は農村の比較的裕福な家庭の6人兄弟の第5子、3男として生まれ、師範学校卒業後は、小学校教師として生活してきた。

幼少時より、無口、内気で学生時代にも非社会的、孤立的な性格のため変人あつかいを受けたという。

母は父と同じ村の地主の7人兄弟の第2子、次女として生まれ、性格は明朗、勝気で社交性に富み、多少神経質な面もみられたが、何事にも積極的で、患者らの発病後は保険の外交員として毎年優秀な成績をあげていた。

父母の家系に特に精神病的負因はみられなかった。

両親は見合結婚で、結婚生活は極端に異なる性格傾向のためか、しっくり行かず、常に心の中で反撥しあい、母は何時も離婚のことが念頭から離れなかったという。

しかし、つぎつぎと子供が生まれたため、離婚には至らなかったが、夫婦の間柄は打ちとけ合わず極めて冷たく、家庭の雰囲気も暗かった。

父は、長女（症例1）には比較的強い愛情を示したものの、他の子供にはほとんど無関心で、口をきくことも少なく、子供達も父には余り馴染まなかったという。

母はほとんど子供に愛情をもたず、憎しみに近い感情さえもっていたと述べている。

両親は結婚後、父の勤務地であった北海道の数か所の小学校を転勤とともに移り住み、つぎつぎと5人の子供をもうけた。

ところが昭和19年、父が炭鉱での“勤労作業”遂行中、落盤事故にあい急死した。このため一家は郷里に戻った。

なおこの父の事故死は、父と全く関係のな

い坑道で起こったもので、非常に危険なその坑道に無断で入って死亡したため、周囲の人々から異様に思われたらしく、自殺ではないかとの噂がたったという。

その後約3年間、父方祖父母の下で子供達と母との生活が続いた。

しかしその後、母は末子（後に溺死）のみをともなつて、函館の姉の嫁ぎ先に裁縫の修業にでかけた。

このため女3人は父方実家、長男は母方実家にひきとられて暮した。この期間の生活は、患者達にとって非常に楽しい生活であったと述べている。

母が修業を終えて実家に戻り、仕立物などをしながら細々と生計をたてるようになったが、娘達はなお父方祖父母の許に止まった。

その後、母が実家から独立して家を借り、久し振りに母子全体が揃っての生活が始まった。

当初は暮しも比較的楽であったが、次第に経済的に困難となり、父方・母方から経済的な援助を受けて生活するようになった。

ところが、昭和29年頃より母は、隣村の10才も年下の男性と親しくなった。

この男は次第に、酒を飲んで母の所に泊り込み、同室に寝ている長男の側で性的な行為を行ない、乱暴をしたり、二階に寝ている娘達の部屋に入りこんでは性的な悪戯をしたり、暴力を振るって母と口論を繰り返すこともしばしばであった。

こうした乱脈な家庭の状態は村中に知れわたるところとなり、村人や級友から陰口として噂されることは勿論、面と向かって非難の言葉を浴びせられ、子供達は男が家に来ると、激しい不安感情と、母に対する強い嫌悪と憎しみの混りあった気分になったらしい。

母とその男との関係は約2年間続き、その男の結婚により終止符がうたれた。

しかし、昭和31年初め、男の結婚式に母が錯乱状態で闖入し、同席者の強い非難を浴びたという。

なお、患者達は面と向かって母を非難することもなく、姉妹弟同志でもお互いにそれについての話し合いを避けていたらしい。

昭和31年春頃から同胞4人ともほぼ相前後して発病している。

症 例

長女・34才。発病時短大学生。

性格傾向：内気、無口で社交性に乏しいが、空想的な一面も強かった。

発病及び経過：21才時（昭和31年）春頃より（短大2年時）、何となく物思いに沈みがちになった。この頃より短大の教師の態度・視線が、すべて自分を中心にして動くように思われ、自分に好意を寄せているように感じ、先生のことばかり空想するようになった。

しかし、特に行動上の破綻はみられず卒業した。

こうした被愛感情はその後も持続していた。一年後より中学校の英語教師として勤務した。勤務後間もなく、同僚の男性教師の何気ない行動が、何か意味あり気で、自分に好意を寄せているのではないかと考えるようになり、自分もその先生が好きになった。

しかし、その感情を打ちあけることはしなかった。

4月の新学期になり、今まで只一人の女教師であった患者の外に、新任の女教師が赴任してきた。それ以来、その女教師に自分の好きな先生を奪われてしまいそうな気がして、次第に活気が失われてしまった。食事をして誰かに食べさせられているような気がする。先生を見ると副食物に見えて食べてしまいたくなる。自分が自分でなくなったようだ。景色をみても何も感じない。食べることばかりに気持が集中して授業もする気力がなくなり、母と共に来院入院した。

来院時の症状としては、作為体験・離人体験・被愛妄想・食事に関する訴えが中心に認められた。

入院後、ISTを26回、その他、薬物療法を行ない、ほぼ寛解状態で3か月後に退院した。

しかし2か月後に再び、離人体験、注察・関係妄想、幻聴、異性に関する強迫観念がみられるようになり再入院した。

再入院後は、各種の向精神薬による薬物療法、EST、IST、作業療法が行なわれたが、人格水準の低下は高度であった。

入院5年にして、ほぼ社会的寛解状態に達して退院した。

退院後も、症状は不安定で、感情の動揺も大きく、向精神薬の投与によって、入院には至っていないが、簡単な家事程度の仕事を行っているのみで、完全な社会生活には耐えられない状態が続いている。

次女・33才。無職。

性格傾向：非常に内気で無口、友人もなく、孤独であるが、短気で無頓着な傾向もみられた。

既往歴：軽度の難聴が幼少時よりみられた。

発育及び経過：20才春（昭和31年）頃より、急激に抑うつ・嫌人的となり、母に会いたがらず、男がつきまると困ると言いだし、某病院で電撃療法を一回受け、その後は大体病前に回復した。同年秋には自分から働らきに行くと言って上京し、女中・女工などの職を転々としたが、電車の定期券の不正を発見され罰金を科せられた。この事件の直後、自殺を図ったが救命されて帰郷した。

帰郷後間もなく、睡眠障害、拒食、人のいない所に行きたい、何か家の内に変な雰囲気がある、何か起きそうだと言って徘徊するようになった。

来院時、街奇的な姿態を示し、時に児童的な振舞いもみられ、母に殺されるといった被害的内容の幻聴・妄想・作為体験などが主に認められた。

入院後、EST、IST、薬物療法を強力に

実施し、10か月後に軽度の不関状態を残して退院した。

しかし一か月後、母に殺されるという妄想・幻聴を主症状として再入院した。

再入院後は、急速に荒廢状態に転落し、強力な各種治療に抵抗し、高度の無為・自閉を示し、時に刺激的で興奮状態となり、昭和35年には Lobotomie が実施され、昭和44年現在も入院中である。

3女。事務員。30才。

性格傾向：無口・孤独で友人も少なく心配性な方である。

発病及び経過：17才時（昭和31年）春頃から、高校の先生の視線が気になり、先生が自分を変な目で見ている、また自分も先生を変な目つきで見返しているのではないかと考えるようになり、このことが頭の中を占領して他の事は考えられず、特に男の先生の視線が強く意識された。こうした強迫観念・注察念慮は次第に増強して、バスの中の人々や、道で出会う人々にまでひろがり、人前に出るのがひどく苦痛になり、母と共に来院した。

当時、幻覚・妄想などは認められなかったが、視線についての強迫観念・注察念慮が強く認められ、不安感情も高度であった。

強迫神経症の診断の下に精神療法・薬物療法が行なわれたが軽快せず、心的接触も充分得られなかったため、EST 4回、IST 29回施行し、寛解状態に達し退院した。

その後、現在まで特に著変なく、社会的にも充分適応した状態が続いている。

なお、前記3症例はすべて、全経過を通じて、発病前の葛藤状況について自ら語ったことはなかった。

長男。大学生。昭和36年自殺（当時20才）。

本症例は、著者が主治医として治療を担当した。

性格傾向：非常に明朗で、交友関係も多く、大胆なことをする方であった。

既往歴：軽度の内耳性難聴があった。

発病及び経過：昭和31年春頃より、次第に無口となり、人嫌いの傾向が強まり、今までの明るい性格とは全く正反対に、暗い感じを受けることが多くなった。これと同時に難聴に対する劣等感が増強し、誰かと一緒にいると相手の視線が強く意識され、憂うつな気分になると洩らすことが時々見られ、母親もその気性の変化に驚くほどであった。

しかし、こうした状態は特に増悪することもなく数年間持続した。

大学入学後間もなく、新しい環境、新しい級友に馴染めず、大きな教室で講義も聞きとり難いことが多く、種々思い悩むようになった。

この頃より、他人の視線が自分に向けられると、自分の劣っていることがみすかされはしないかと心配になり、特に若く明朗で社交的な女性の視線に会うと、相手が自分に好意を寄せているような気持になり、そのため自分の表情が変わって硬くなり、相手に誤解され、気持を傷つけるのではないかと考え、ますます視線を合わせるのが苦痛となり、この苦痛を処理できず、学業もほとんど手につかず、自ら入院を希望して来院し、入院した。

入院後も前記の症状は持続し、表情も暗く硬いもので、無口で、同室の患者達との接触到に乏しく、常にうつ向き勝ちで、主治医との深い心的交流は得られなかった。

各種薬物療法、ESTと並行して支持的な精神療法を行なったが目立った改善は得られなかった。時に多少の軽快状態を示しても持続せず、短期間で悪化するといった経過をとっていた。

しかし、入院4か月目に入って間もなく、面接中に何の前触れもなく急激に、発病前の激しい葛藤状況、母に対する憎しみ（特に自分達を残して函館に行ったことと、男性との不倫な性的交渉について）を、強い感情とともに主治医に語り、その後、急速に激しい錯乱興奮状態となった。

しかし、毎日の精神療法的面接の繰返しにより、状態は急速に改善され、ラポールは一層深まった。その後、インシュリン・サブシヨック療法を併用し、翌年2月からは、近くの精神病院へ規則正しく作業療法に通院できるほどに改善された。この頃、対人関係に多少の問題は認められたが、表情も明るく、患者間の交渉も非常に豊かになった。

また、新学期からは、病院よりの通学を始めた。

この頃、主治医であった著者の学会出席、その後、地方病院への赴任のために主治医の交替と続いたため、患者との面接は長期間行なわれなかった。このため復学後の患者の心の動きについては知ることができなかった。

新学期が始まって1か月後の5月初旬、薬局より買い求めた眠剤による自殺企図があり、このため死亡した。

長女についての考察

長女は妹弟の中で最も父に愛され、父に対して強い愛着と尊敬の感情を抱いていた。母との不本意な別離と母の性的なふしだらさに対しての強い憎悪感、一層父に対する愛情と憧憬を強めたもようである。短大の教師に対する、被愛感情・恋愛感情は、その教師が父に似ていたという患者の言葉からしても、人生の比較的早期に失った父に対する感情の“置き換え”とみることができよう。

その後、田舎の中学校の英語教師として教壇に立つようになり、非社交的・内気な患者は一層強く、女性独りということ意識を始め、庇護者的愛を一身に注いでくれる新しい父代理としての可能性を男性教師の中に見出したものと考えられる。

しかし、新任の女教師の出現は、かつて父を不慮の事故で失った記憶を呼び醒し、かつ父代理となった愛情の対象である、男性教師を奪われはしないかという強い不安感・被害念慮を増強せしめ、この強烈な不安・緊張感は一層自我の衰弱を惹起し、離人感・作為体

験へと症状を進展せしめ、父代理を食物として摂取するという願望体験により、父親・男性教師を同一化・一体化して他者からの脅威を免がれようとしたものと思われる。

次女についての考察

本症例の20才時の症状すなわち、母に会いたがらないこと、男につきまとわれて困るなどは、母と関係のあった男にしばしば寝室を覗かれたという事実があり、また患者がこの記憶に強い不安を示しており、病的状態がこれらの出来事と連続して起こっていることから直接理解できるものであろう。

また、こうした事実と連続的に起こってきた精神病状態であったためと、複雑な心理機制を欠いたが故に、短期間の治療で軽快したものと考えられる。

20才秋に自分から上京し、女中・女工などの職を転々としたが、これらの職業は、彼女の性格から考えても無理なものであった。

その上、難聴が彼女の生活に一層強い緊張を強いたものと思われる。

こうした緊張状態は、定期券の不正使用の発覚という事件を契機にして一挙に破局に達し、自殺という行動に追いこまれたものと考えられる。

治療により、一旦回復に向かったかに思われた彼女の自我は、不馴れな環境における職業従事、不正行為の発覚、自殺企図といった一連のできごとにより、再び解体の道を歩み出した。

その上、帰郷した家においては、彼女にとって発病の直接的契機となった母との同居生活が待っていた。

こうした不安状況にさらされた生活状況にあっては、最も単純な抑圧は失敗して、母への激しい憎悪・攻撃感情を投射して、母に殺されるといった被害的な妄想世界に退行する以外に、彼女の衰弱しきった自我を防衛する手段がなかったのではなからうかと考えられる。すなわち、彼女の実在は、“病める実在”

としての妄想可能の現出であったものと思われる。

三女についての考察

深刻で、強烈な母に対する非難・憎悪の感情を直接表現できなかった患者は、激しい攻撃性を抑圧しようとしたが、抑圧に失敗し、この病的な努力に費された大きなエネルギーの消耗により、彼女の自我は衰弱し、母への憎悪の反動として父に向けられた愛情は、一層増強され、父が教職にあったということから、学校という場で破綻し、教師のまなざしは、母を批難する父親のまなざしと変わり、それを自己への非難として受け入れざるを得ない状況に追いこまれたものであり、次いで、この非難のまなざしは、周囲の人々に拡散し、視線に対する恐怖、すなわち、自己と同一視した母の性的なふしだらさに対する非難を意味する視線恐怖となって出現したものとと思われる。

長男に対する考察

本症例は軽度の難聴を有し、学校友達や村人から面と向かって母の性的なふしだらさについて非難されたことが多かった事実から、明朗であった患者が、急激に引込み思案になり、注察念慮・敏感傾向を増大させたことは充分理解できるものである。

また、若い女性の視線が、自分に向けられると、自分が愛されているのではないかという被愛感情と同時に、相手を傷つけはしないかという強迫的な感情が出現したが、これは長期間母と離れて生活していたために、何時も母に側にいてもらいたいと考えた願望の一方で、待ち望んだ母との同居生活が実現した後起こった母の乱脈な性生活、母の情夫による暴力行為などにより、母に対する激しい愛着と憎悪感との矛盾した心的葛藤によって生じたものと考えられる。

すなわち、母に対する深い愛着と憎悪感の混入した複雑な感情（両価感情）が投射さ

れ、特に母と性格の似た、明朗で社交的な女性に対する被愛感情と同時に相手を傷つけはしないかという強迫感情の両価的な感情になって出現したものと考えられる。

総括及び結論

以上を総括してみると、これら4人の患者は、幼少時に父を自殺とも考えられる不慮の事故で失い、母との長期間に亘る別居生活を送り、待ち望んだ母との生活に入った後、母の性的不倫の生活と相手の男性の無法な行為に悩み、その男性の結婚式に母が取り乱して闖入し、周囲の人々から強い非難を浴びるといった大きな心的外傷を体験し、その後間もなく、ほぼ時期を同じくして、いずれも病的状態を現出したという比較的稀有な症例である。

さて、これら4症例の診断について個々に述べてみよう。

長女・次女の2症例は、症状・経過・現在の状態像から考察して、精神分裂病とすることには特に異論はないと思われる。

また、長男は発病5年にして自殺することによって自らの生を絶った。この間の経過・症状は、典型的な分裂病とはいえないものを含んでいる。しかし、分裂病に特有な接触の悪さ、心因の明確化した後にまでみられた症状の根深さ、死後発見された日記中に示された対人関係の高度の硬直化、(この症例については、日記を中心として別の機会に再び発表する予定である)、性格の変化などから推定して、分裂病とするのが一番妥当のように思われる。ただ、基礎性格がむしろ循環気質に近かったために、状態像が不純化したものとも思われる。

三女は、経過及び発病十数年を経た現在においても、人格欠損は見られず、社会適応も充分なことから心因反応とみなすこともできるであろうが、本症例が発病直後に、他症例より最も早く治療が加えられた事実から考えて、経過・予後の良好な分裂病であったと考

えることができよう。

次に、これらの症例の発病がほとんど同時期であったことから、感応性の精神病の可能性を考えることもできようが、これらの4人の患者の間には、強い心的交流、依存関係は認められず、特に長女と次女はきわめて仲が悪く、終始反撥しあっていた事実と、前述した経過・予後の点及び、三女・次女を除いた他の2例は、症状が比較的、主観的段階に止まっていた期間が長く、行動の異常性に気付かれたのは、発病後数年を経た後であったことなどからも否定し得るものである。

次に、4症例の症状、特にその妄想・強迫観念について考察してみたい。

これら症例において、きわめて特徴的と思われる事実は、一貫して女子患者においては男からの被愛感情・注察・関係妄想が中心をなし、男子患者においては女性からの注察・関係妄想・罪業念慮様の強迫観念が中心をなしていることである。

これらの症状から性的な色彩のきわめて濃厚な妄想・強迫観念と考えることが可能であろう。しかもこれらの妄想・強迫観念は、幼少時からの両親に対する人間関係及び生活環境に強く影響されており、彼等の心的葛藤状況と密接な関連の上で形成されたものであることは明らかである。

すなわち、次女では、男につきまとわれて困る、母に殺される、家に何か変な雰囲気があるなどの訴えがそれであり、長男においては、母に対する両価感情の表現である被愛妄想・罪業念慮様の強迫観念であり、長女における父代理としての男性教師に対する被愛妄想・食人思考であり、三女における教師からの注察念慮である。

特に長男は、母に面会するたびに病状が悪化したのに反して、発病前の心的葛藤状況を面接中に主治医に語った後、急激に錯乱・興奮状態を呈したが、その後の精神療法により急速に病状の好転がもたらされ、接触も深まり、母と相手の男性のことを平静に話し合え

るようになった。その際、母が可愛想になってきたと述べるなど、一見きわめて安定した精神状態が得られた事実から考えても、これらの症状における心的葛藤、生活史のもつ意味は明瞭であろう。

翻って、分裂病妄想の成立機制に関する理論をみると、分裂病そのものの本態に関する理解の仕方によってそれぞれ異なり、それらの見解もきわめて複雑多岐で、そのいずれが真であるかは現在のところ全く不明であり、混沌としているということができよう。

しかし、著者は前述の4症例の考察、特に長男例の精神療法過程の病像変化を通じて、分裂病妄想が、その人格にとって全く異質で了解不能な観念・思考であって、不可解な“病的過程”によってのみ生ずるものではなく、むしろ患者の生活史の深い理解によってその成立機転を明らかにし得る場合が少なくないことを知り得たと考えている。

御校閲下さった、佐藤時治郎教授に深く感謝致します。また、症例について種々御助言下さった、元教授、山村道雄先生に深く感謝致します。

参 考 文 献

- 1) BINSWANGER, L. : 新海, 宮本, 木村訳: 精神分裂病. みすず書房, 1961.
- 2) 井村, 懸田, 島崎, 村上編: 異常心理学講座 10巻. みすず書房, 1965.
- 3) 猪瀬, 台, 島崎編: 精神分裂病. 医学書院, 1966.
- 4) JASPERS, K. : Allgemeine Psychopathologie, 6. Aufl., Berlin., 1953.
- 5) KOLLE, K. : 久保, 塩崎訳: 精神医学における人間像. 文光堂, 1965.
- 6) MINKOWSKI, E. : 村上, 野沢訳: 精神分裂病. 弘文堂, 1946.
- 7) 三浦岱栄監修: 精神療法の理論と実際. 医学書院, 1965.
- 8) 宮本忠雄: 精神分裂病の世界. 紀伊国屋新書, 1966.
- 9) 村上, 満田編: 精神医学. 医学書院, 1963.
- 10) 中修三編: 精神分裂病. 医学書院, 1959.
- 11) 西丸四方: 病める心の記録. 中央公論社, 1968.
- 12) 小川信男: 分裂病心性の研究. 離人症と両面性の問題をめぐって. 精神経誌, 63, 62-91, 1964.
- 13) 荻野恒一: 精神病理学入門. 誠信書房, 1964.

14) SCHNEIDER, K. : 平井, 鹿子木訳 : 今日の精神医学. 1961.

15) SECHEHAYE, M. A. : 村上・平野訳 : 分裂病の少女の手記. みすず書房, 1955.

AN APPROACH TO THE SCHIZOPHRENIC

Part IV. Discussion of delusion in 4 schizophrenic siblings

By

KIYOKAZU FUSE

*Department of Neuropsychiatry, Hirosaki University
School of Medicine, Hirosaki (Director : Prof. T. SATO)*

The author discussed the familial situation and psychodynamic in 4 schizophrenic siblings.

In childhood, they lost their father because of his presumable suicide, and soon thereafter they were separated from their mother. In adolescence, they started to live together with their mother who was sexually promiscuous.

Following a psychic trauma due to their mother's violence at the marriage ceremony of her boyfriend, they became delusional.

Conclusions drawn by the author :

1. Delusion in schizophrenia is not an expression of utterly abnormal and understandable ideas and thought. Rather developmental mechanism of this delusion can frequently be elucidated in not a few cases by deep insight into the life of the patient.

2. The delusion of the oldest brother was an expression of his ambivalent feeling directed to his mother. Those of the other 3 sisters were understood as being related to their mother, their environment and their emotional conflicts.

3. Between these siblings, there were wide differences in symptoms and prognosis. They depended on the premorbid personality, attitude toward parents and the time of initial treatment.

(Autoabstract)